



残暑お見舞い申し上げます

こんにちは、しむぷりずむの
ましろあや&ゆずぽんずです。
今回初のコミケ当選という
ことで、折角だからなんか
ノベリティでも作ろうか、
と話していたのですが、~~メ~~切に
追われそんな時間もなく。
ならば『英国紳士とオタク〜』で
取りこぼした小ネタを集めた
おまけ本はどうだ？
ということで作ってみました。
ページ数やレイアウトの関係で
没になった絵&書きたいけど
入らなかった絵をもとに、
小話をつけた遊び本です。
肩の力を抜いてゆるく
楽しんで頂ければ幸いです。



表紙の「あー」な日本さんは、本当は目次に入る予定だったもの。
この抱き枕は小説1の落書きです。



「ううう…このコマがどうにも可愛くならないッ！」

頭を掻きむしり懊悩する日本の後ろからひよいと原稿を覗き込んだフランスは首を傾げた。

「そう？　可愛いよ、とつても可愛いと思うけど？」

「そう…ですか？　うーん…でもなんかこう…萌が足りない気がするんですよ。萌…萌が…」

眼を虚ろに、萌をくれと呟き出すのは修羅場で切羽詰まった時の日本のいつもの姿である。「萌ねえ……」と考えたフランスは、思いつきを口にした。

「だったら萌なものを考えて萌々しながら描けばいいんじゃないのかなあ。梅干しを考えたら口の中に唾が、つていうヤツ、あれみたいな感じでさ」

「萌……考える……プラシーボ効果…？」

「そうそう。ほら、菊ちゃんの萌、今一番萌えるのは何かなあ、想像してごらん」

「萌……ふおおお……決まっていますよ、イギリスさんー！　イギリスさん、テライケメン！　激萌です！」

おおっと、そう来たか。そこでイギリスが出てくるところで、あーやっぱりこの二人付き合ってるのね、と納

得してしまうところである。

「ううう、イギリスさんに会いたいです……イギリスさん成分が足りません……だから萌が描けないんですよっ！ 誰か！ 誰かイギリスさんをここへ！」

「いやいやいや、待って待って、君の素晴らしいその妄想力はなんの為にあるの！ 妄想！ 妄想だよ！ リアルに頼るなんてオタクの名折れよ！」

冗談じゃない、ここでイギリスが来たらこの原稿は落ちる。きつと落ちる。8割の確率で落ちる。だってさようならよう入稿、こんにちは通常×切の日付なのだ。

「そ、そうですよね……」

と呟きながらも、じと眼になっている日本はよほど恋人が恋しいのか、「ううう……イギリスさん……」と小さく呟いている。そういえばここ二ヶ月国際会議がなく、日本も原稿で籠りつきり。会っていないのだろう。

はた迷惑な痴話喧嘩でとばっちりも喰らうが、なんだかんだ言ってこの二人はラブラブなのだ。

切羽詰まったこの原稿時期は被っている猫も剥げ素が見えるが、普段はしれっとした顔で色恋など興味ござい

ませんという顔をしている日本のこれが本音かあ、いいねえ、恋愛だねえ、とニヨニヨしてしまうフランスである。なんととっても愛の国だ。

「じゃあそのイギリスの萌をイメージして、描いてごらん。イギリスがどう萌なのか、考えて描けばいいさ」

「イギリスさんの萌な所なんて挙げたらきりないです。寂しがりやのツンデレに王子様な容貌、俺さまに見えて優しく紳士で……ダメです、私の妄想力では追いつけないし、私如きの筆力では表現しきれません！」

「……え。」

そっち？ まさかの心折れるパターン？ いや、お兄さんそこばかりは同意できない！

啞然とするフランスの前でどうせ「私なんて……」と自信喪失した日本が原稿にGペンでの字を書き始める。

「ぎゃー！ 日本！ 落ち着いて！ みゆうたんの顔がバカボンになっちゃう！」

慌てて腕を取り上げるが、めそめそした日本の機嫌は暫く直らず。居ても居なくてもはた迷惑なイギリスに、フランスはがっくりと肩を落としたのだった。



原稿中によくあること。

ニャん

ふ、ふ、ふ、
ふ、ふ、ふ、
ふ、ふ、ふ、



原稿のジャマをし
くする...

フフ...



十一あ
おなでなさい

わたしは空耳の
読めるねこ



オウガイ
ズ



ニャん
猫



楽しそうなイギリスさんだけど、
最初に見た時の衝撃を想像すると笑える……。



ニ
た
あ
……



本編中に
足だけ出演
ユージン香くん
入れたかった……

□ イギリスさんと部下の話。

「……だから、クラウツんちの制服じゃねえって言うてんだろ！——あああ、もういい！！ お前の所には頼まない！ それでいいんだろがよ！」

鼻息も荒くガシャンと電話を叩ききった上司の、次に発するであろう言葉は予想通りのものだった。

「おい、布地屋を呼べ」

「イギリスさん、もしかしてあの服作るんですか？」

ぎろりと本人は睨んでいるつもりなのだろうが、長いつきあいだ。子供が癩癩を起こしているようにしか見えない。——祖国に対して些か不敬ではあるが。

「タブロイド紙辺りにばれて、紙面飾るようなことになつたらやばいですよ。王子の二の舞なんて勘弁してくださいよ。怒られるの守り役の俺達なんですから」

といつつ短縮ボタンを押し、これだろうと思う生地をオーダーしていると「——それから刺繍用の金糸。太いやツ」と注文がつけられる。はいはい、と伝えて電話を切っても、イギリスの機嫌は斜めなままだった。

「気が進まないなら、やめとけばいいじゃないですか」
わざわざ己の傷を抉るような真似をしなくても、とは言わないでよく。

「……仕方ねえだろ。恋人の願望なんだからな。おれは別にそんな格好したいわけじゃないし、服だって作りたわけじゃないけど、あそこまで熱望してるなら叶えてやるのが恋人の務めだろうが」

いや、別に日本さんはそんなことを願って書いたわけじゃないんでしょうがね、と部内で廻ってきた件の本の翻訳版を読んだ身としては思うのだが。むしろ、上司に対して色々鬱憤溜まった挙げ句の捌け口に見えたのだが。「しょうがねえよな、あんなポルノ本書くほど欲求不満だったなんて、しかも恥ずかしいからって立場逆転させるだなんて日本は本当にシャイだよな……」

ククク……と悪い笑みを浮かべる上司はどうやら強引な軌道修正で話の意図を曲解したらしい。なんでもいいがこれはここ暫くでは珍しく機嫌が良くなった上司に仕事をさせるチャンスだと踐んだ部下は、「とりあえず判子ください」と書類の山を積み上げることにしたのだった。



おくづけ

しむぷりずむ おまけ本

2012/8/11

ましろあや&ゆずぽんず